

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第956号 平成27年6月30日

限界への挑戦

錦織圭さんは、世界のプロテニス界で大活躍しています。先日行われた全仏オープンでは、準々決勝でジョーウィルフリード・ツォンガ選手とフルセットを戦って敗れましたが、ぐんぐんと力を付けている錦織選手に世界中のテニスファンは注目していますし、いよいよ始まりましたウインブルドンテニス選手権ではメジャー初制覇を期待しています。

さて、この錦織選手が昨年10月に開催された楽天オープン戦でラオニッチ選手との死闘を制して優勝した事は、記憶に新しいところです。その時彼は、優勝の弁の中で「体がきつかったが、限界を超えて戦えた」と述べています。楽天オープン戦が行われた前の週には5日間で4試合というハードなマレーシア・オープン戦を戦って優勝し、その疲れも癒せぬまま楽天オープン戦に臨んだ錦織選手だからこそ、「限界を超えた」という言葉にも説得力が感じられます。

錦織選手が「限界を超えた」と述べているのは、恐らく、連戦が続いていて、自分では肉体的にも精神的にも限界だと思っていたが、その限界点を超えて戦えたという趣旨であろうと思います。

錦織選手の連戦し続けるハードな日程を見ると、彼のスタミナや精神力はずば抜けていますが、にもかかわらず限界を意識したというのですから、プロの世界は凄まじいと思います。

その錦織選手は、貴重な教訓を我々に示しています。それは、「自分で設定した限界は超えられる」という事です。「なんだそんな事か!」と思われる方もいらっしゃるでしょうが、皆さんは、限界という言葉に縛られている事はないでしょうか。「これ以上は肉体的に限界だ」とか「これ以上は、精神的に持たない」といった具合にです。

限界とは何か、広辞苑では次のように説明しています。

物事の、これ以上はないというぎりぎりのさかい

限界という現象は、私達の身の回りには随所に在ります。

まず、私自身、限界と感じている事が山程あります。例えば、英語の通訳をやれといわれても、それは私の能力の限界を超えています。100メートルを10秒で走る等というのは、夢にも見た事はありません。

何を限界と感じるかは人によって異なりますが、スーパーマンでさえクリプトナイトという弱点があるように、どんな人にも限界はあります。

また、手元に2万円しかなければ、どんなに欲しいと思ってもダイヤの指輪は買えません。こういうのを数学的限界と呼ぶそうです。

空気がないところを飛行機は飛ぶ事は出来ません。これは物理的限界です。

このように、いたる所に限界は存在します。そして、その限界点を超えたら、人間なら、肉離れや骨折、心臓麻痺等のトラブルに巻き込まれますし、精神的には心が折れるといった事態にもなりかねません。

また、2万円しかないのに5万円のものを手に入れようとしたら、借金するか、泥棒するしかありません。借金も、借りる時は有り難いと思いますが、返済という地獄の日々が待っています。勿論、泥棒すれば警察の御用となって塀の内側に入る事になります。機械であれば、与えられた機能を超えて働かせようとすれば、機械は故障し、事故を引き起こす要因となるでしょう。

このように、沢山の限界に取り囲まれて生活している私達ですが、人類の歴史を振り返れば、それは限界に挑戦し、限界を乗り越えて来た歴史ともいえます。

ノーベル賞受賞者の江崎玲於奈氏は、その著「限界への挑戦」の中で、「人類文明はさまざまなテクノロジー（技術）を生み出す事によって、発展してきた。そこでは、先人達が“人間の能力の限界に対する挑戦”の歴史を見る事ができる」と述べて、3つのプロセスを示しています。

第1は、19世紀以来、人間は自らの身体でできる仕事量の限界をさまざまな機械を工夫して破り、より速く、より力強く、物理的能力を飛躍的に拡大して来た。また、より小さなものを見たい、操作してみたいという小ささへの挑戦がナノテクノロジーという新分野を開拓してきた。

第2は、20世紀になり、人間は頭を使って行う情報処理能力の拡大に取り組んだ。

第3は、今世紀になり、人間の寿命の限界に対する挑戦が、バイオテクノロジーという画期的な分野を開拓してきた。バイオテクノロジーは自然の摂理とでもいえるものへの挑戦であり、この意味で我々は全く新しい事態に直面している。

江崎さんが紐解いて見せてくれたように、人間は、限界に挑戦して来たからこそ発展して来た事は確かだと思います。

私達の前に立ちだかる限界という壁は、決して消えて無くなる事はありません。人間は、英知によって沢山の壁を乗り越えて来ましたが、それは同時に、新しい壁を発見する旅でもありました。

錦織選手も「自分の限界を超えた」と述べていますが、それは、限界点がより高くなったという事を意味します。ですから、錦織選手は、これからも常に自分の限

界に挑戦し続ける事でしょう。

人は誰でも、今よりは少しでも前に進もうという意思とエネルギーがある限り、
限界への挑戦者で在り続けるに違いありません。

(塾頭 吉田洋一)